

「出産」の講義に感動する男女大学生たち

船橋 恵子

桜美林大学国際学部助教授(社会学)

昨秋、東京大学で社会学特殊講義という枠で自由に講義する機会を得た。そこで、「産育の比較社会学」と題して、出生率低下、現代の出産、女性が働き続けること、産育保障システム、産育に参加する男たち、家族や生活文化の国際比較といったトピックスを、13回にわたって話した。全体に具体的な資料を示したが、特に出産については、ビデオもみせてリアルに話を進めた。このようなテーマに、果して何人の学生が関心を持つだろうかといささか心配だったが、意外に大勢の聴講者があった。

やはり女子の受講率は高めで、4割ぐらいだった。概して女子学生は、出産の問題を自分がいずれ直面するであろう重要な課題として切実に受け止め、医療化された現代のお産の実態にショックを受け、産む/産まないを迷い、子どもを育てながらどうやって仕事を続けていくかを悩んでいる様子がみえる。彼女たちの質問やレポートには生きた〈問い〉がある。彼女たちは、これまで男子よりよい成績をとり、女性だからといって特に差別されているとは感じていなかったようだが、就職や産育を目の前にして、いままでの自信にちょっぴり不安がみえる。しかし、のびのびと育った若い世代の女性にこそ、出産・育児の壁を乗り越えて進んでいって欲しいと願わずにはいられなかった。

さて、6割の男子学生は、どんな気持ちでお産の話を聞いたのであろうか。わたしは、男子が多いからといって遠慮せずに、「仰臥位」とか「内診」「陣痛」「会陰切開」「会陰保護」「母乳マッサージ」まで生々しく語った。また、クローヴァード(擬娩)や妻の出産に立ち会う夫たち、育児休暇をとった男性

の体験などについても、具体的に話した。概して男子学生は、とても熱心に聴いてくれた。ある男子学生は、「実際に赤ちゃんが生まれてくるシーンを初めてみて感動した。生のすばらしさを感じて体が震えた。母親と臍の緒がつながった状態の赤ちゃんや血だらけの赤ちゃんをみて、出産は決してきれいごとでは描けないものだったと思ったが、それに見合って余りあるほどの生の尊さを感じた」と感想を書いている。女子学生には、お産をするのが怖くなったという声もあったが、男子学生は、自分が直接に産めないだけに生命誕生の感動がストレートに感じられるらしい。少なくとも興味本位の受け止め方や無関心からは程遠く、お産は彼らにとって本当に関心のあることのようなのだ。いくつかの男子学生のレポートに、「おもしろい講義だった。特に、出産のビデオは感動した」「これから、男性も出産や育児に取り組む時代」「男だから知らないではすまされない」と書かれていた。

考えてみれば、彼らはこの講義に出会うまで出産のリアルな姿を知らされていないのである。学校教育のなかには「産む」ということがすっぱりと抜けている。いかなる理屈よりも、お産の実実をみせたら、よい性教育になるのに。男性も、お産の大変さと、それを体験する女性のリアリティーを知り、女性を愛するとはどういうことか、また自らが生を受けたことの価値を考えて欲しい。男子学生の反応は、男性も出産に感動するところを持っていることを教えてくれる。この春から高校の家庭科の男女共修が始まった。学校教育で、もっとお産を取り上げて欲しい。そして、助産婦さんが青年男女にお産の話を増えると思う。